

# 附属中学校と附属特別支援学校における 交流及び共同学習・障害理解教育の実践的研究

石川衣紀<sup>1)</sup>・田口眞弓<sup>2)</sup>

高濱功輔<sup>3)</sup>・北村由紀<sup>3)</sup>・森小夜子<sup>3)</sup>・佐藤弘章<sup>3)</sup>・堺雅子<sup>3)</sup>

長友睦子<sup>4)</sup>・野坂知布<sup>4)</sup>・吉田ゆり<sup>1)</sup>・高橋甲介<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>人間発達講座 <sup>2)</sup>発達支援アドバイザー <sup>3)</sup>附属中学校 <sup>4)</sup>附属特別支援学校

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1 共生社会の形成と障害児者理解

障害児者を主体とした初の人権条約である「障害者権利条約」が2006年に国連で採択され、「全ての障害者によるあらゆる人権及び基本的自由の完全かつ平等な享有を促進し、保護し、及び確保すること並びに障害者の固有の尊厳の尊重を促進すること」が提言された。例えば第8条「意識の向上」では、「教育制度の全ての段階（幼年期からの全ての児童に対する教育制度を含む。）において、障害者の権利を尊重する態度を育成すること」等について規定され、2014年に本条約を批准した日本においても、その遵守がすべからく求められている。

日本では2004年の障害者基本法改正により、第14条第3項に「障害のある児童生徒と障害のない児童生徒との交流及び共同学習による相互理解の促進」が規定され、交流及び共同学習について初めて法令上の位置づけがなされた。これを受け中央教育審議会（2005）による「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」では、小学校・中学校・高等学校等における障害のある児童生徒と障害のない児童生徒の交流及び共同学習と、盲・ろう・養護学校と通常の学校における交流及び共同学習の促進が提言された。

2007年度より特殊教育制度から特別支援教育制度へ転換がなされ、特別支援学校学習指導要領（現行版、2009年告示）においても、障害のある子どもと障害のない子どもとの交流及び共同学習を計画的・組織的に行うことが規定された。

2012年に出された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」では、「特別支援教育は、共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システム構築のために必要不可欠なものである」と明記され、その具体的方向性の一つとして「障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである」とされた（文部科学省、2012）。

2013年には新たに「障害者差別解消法」が制定され、2016年4月より施行される。

このように特別支援教育の拡充、インクルーシブ教育の展開、そして共生社会の形成が進められていくなかで、交流及び共同学習や障害理解教育の位置づけはますます大きくなり、同時にその実践内容の深化がいつそう図られることが求められているといえる。

## 1.2 本学部附属学校におけるこれまでの取り組み

長崎大学教育学部においては、とくに附属中学校と附属特別支援学校にて交流及び共同学習・障害理解教育の取り組みが蓄積され、両校の教育課程の変更や社会の変化に伴い、形態や内容についてその都度検討を繰り返しながら継続されてきた。

### ①両校における交流及び共同学習の経緯

交流及び共同学習については、1969年に附属小・附属中の特殊学級が長崎大学附属小中学校柳谷校舎（現・附属特別支援学校）として移転した当時から、文化祭などの行事参観の形で交流がなされている。1984年からは、行事を参観するだけでなく附属中の文化祭（附中祭「秋」）で附属養護学校（当時）の生徒も劇を発表する形になり、交流委員との交流も舞台発表後に継続して行われていた。

2002年の総合的な学習の時間の全面実施に先立ち、附属中では総合的な学習の時間の内容や実施方法等についての研究がなされ、その一つとして附属養護学校の生徒との交流学習の取り組みが行われた。それまで行なってきた文化祭での交流の他に、クラスやレクリエーションクラブ（授業クラブ）の取り組みが加わり、附属中の生徒が附属養護学校の餅つき大会に参加したり、附属中のレクリエーションクラブが企画した内容を附属養護学校の体育館で行ったりした。

その後も交流委員や交流クラスとの交流を行うという形態が継続されていたが、両校の教育課程等の見直しなどもあり、日程的にも附中祭「秋」での劇の発表が徐々に困難な状況となった。2010年度、2011年度については、両校で交流のあり方を再度模索することとなり、実質的な直接交流が見送られている。

このような経緯の中、2012年度に両校で交流の持ち方を改めて検討した結果、附属中1年生と附属特別支援学校中学部生徒との交流会が企画された。附属中1年生の4クラスをベースとし、特別支援学校の生徒1～3年生が4グループに分かれ各クラスに入り、ゲームやスポーツなどのレクリエーションを一緒に行ったり、昼食を一緒にとったりして交流会を行う取り組みを模索し実施するようになった。

また年度によっては、舞台発表や交流会を機に美術作品での交流や手紙のやり取りを行う間接的な交流にも取り組んだ経緯がある。しかし、実施の有無については各校の交流担当者に委ねられるところが多く、継続した取り組みを行うまでに至っていなかった面もある。

## ②両校における障害理解教育の経緯

障害理解教育については、附属中・附属特別支援学校それぞれの教育課程の中で行なわれてきており、附属中・附属特別支援学校・教育学部の三者で障害理解教育をテーマとして共同で授業を計画し取り組む機会はなかった。しかし、附属中においては、障害について理解や見識を深めるということで、長崎大学教育学部の教員による講話を聞いて学習する機会があったり、附属特別支援学校との交流に際し、特別支援学校の教員が交流委員に特別支援学校の生徒の話や障害者について話をしたり、参考資料となる本などを提供したりすることはあった。

個々の学校の取り組みとして、附属中においては道徳や特別活動の時間に各クラスの担任による障害者をテーマとした授業が展開されており、附属特別支援学校では進路や体の学習等を通して、自己理解や自己肯定感につながるような授業を展開している。

障害理解教育という言葉を意識することは少なかったものの、両校において、交流会や作品交流等を通して、お互いのことを体験的に学習する機会になっていた。

### 1.3 研究の目的

以上のように、附属中学校と附属特別支援学校ではこれまで文化祭やレクリエーション、劇の発表等を軸とした交流が一定程度蓄積されてきている。障害理解教育についても、両校の教育課程の中でお互いのことを学びあう時間が設定され、理解の深化が図られてきている。

そのいっぽうで、両校の交流担当者に実施の大部分が委ねられてきたことから、実施の内容について長期的・総括的視野に立ったフレームワークまでは形成しきれていないという課題が残されているといえる。さらには、附属中学校・附属特別支援学校・教育学部の三者の積極的協働による、よりインクルーシブな視野からの障害理解教育の推進が、今後なお不可欠である。

そこで本研究は、今後の継続的取り組みを見通しながら大学と附属学校がより一体となって実践研究を進めていくための方向性を、実践を通して明らかにすることを目的とする。とくに本稿では、2015年度に附属中学校で行なった交流会(附属中学校1年生と附属特別支援学校中学部)を中心に報告し、今後の課題を検討していく。

## 2. 交流会の実践内容

### 2.1 附属中学校における交流会事前学習の実施

今回の交流では、附属中にて大学教員による事前学習（障害理解教育）を初めて実施した。事前学習のねらいを、交流会が相手校との「共同プロジェクト」であるという視点に沿って意識をもたせることとし、附属特別支援学校の生徒とともに交流会をつくっていくという意識づけを行なった。また附属特別支援学校にて行なわれている様々な教育的配慮について紹介しながら、支援を受けることは特別なことではなく、自分たち（附属中学校の生徒）も同じであるという点に意識を向けさせた。

附属中学校・附属特別支援学校中学部交流会 事前学習																				
1	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>○附属特別支援学校について知り、理解や支援が自分たちにも関係していることを理解させる。</li> <li>○交流会が相手校との「共同プロジェクト」であるという視点に沿って意識をもたせる。</li> </ul>																		
2	日時	平成27年10月20日(火) 14:50～15:40																		
3	場所	多目的ホール																		
4	対象	第1学年全員																		
5	過程	<table border="1"> <thead> <tr> <th>時刻</th> <th>生徒の活動</th> <th>教師の手だて</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>14:50</td> <td>1 附属特別支援学校のVTRを観て、実際の生徒の様子を知る。(10分)</td> <td>1 附属特別支援学校での活動内容のイメージをもたせる。</td> </tr> <tr> <td>15:00</td> <td>2 VTRを振り返り、特別支援学校の学びについて理解する。(10分)</td> <td>2 附属特別支援学校における学び・支援の特徴について説明し、その内容は障害がなくても大切であることに気づかせる。</td> </tr> <tr> <td>15:10</td> <td>3 ワークシート①に考えを記入し、発表する。(10分)</td> <td>3 普通の学校生活を振り返らせながら、理解や支援が「自分自身」にも大切なことであることに気づかせる。</td> </tr> <tr> <td>15:20</td> <td>4 交流会が共同プロジェクトであることを理解し、ワークシート②に考えを記入し発表する。(18分)</td> <td>4 附属特別支援学校の生徒は「お客さま」ではなく、交流会が附属特別支援学校との“共同プロジェクト”であることを意識させてからワークシートに回答させる。</td> </tr> <tr> <td>15:38</td> <td>5 お互いの存在について、交流会の実際の内容づくりについて、意識を高める。</td> <td>5 交流会に向けて、本時の学びが日々の学校生活でも活かせるように意識させる。</td> </tr> </tbody> </table>	時刻	生徒の活動	教師の手だて	14:50	1 附属特別支援学校のVTRを観て、実際の生徒の様子を知る。(10分)	1 附属特別支援学校での活動内容のイメージをもたせる。	15:00	2 VTRを振り返り、特別支援学校の学びについて理解する。(10分)	2 附属特別支援学校における学び・支援の特徴について説明し、その内容は障害がなくても大切であることに気づかせる。	15:10	3 ワークシート①に考えを記入し、発表する。(10分)	3 普通の学校生活を振り返らせながら、理解や支援が「自分自身」にも大切なことであることに気づかせる。	15:20	4 交流会が共同プロジェクトであることを理解し、ワークシート②に考えを記入し発表する。(18分)	4 附属特別支援学校の生徒は「お客さま」ではなく、交流会が附属特別支援学校との“共同プロジェクト”であることを意識させてからワークシートに回答させる。	15:38	5 お互いの存在について、交流会の実際の内容づくりについて、意識を高める。	5 交流会に向けて、本時の学びが日々の学校生活でも活かせるように意識させる。
時刻	生徒の活動	教師の手だて																		
14:50	1 附属特別支援学校のVTRを観て、実際の生徒の様子を知る。(10分)	1 附属特別支援学校での活動内容のイメージをもたせる。																		
15:00	2 VTRを振り返り、特別支援学校の学びについて理解する。(10分)	2 附属特別支援学校における学び・支援の特徴について説明し、その内容は障害がなくても大切であることに気づかせる。																		
15:10	3 ワークシート①に考えを記入し、発表する。(10分)	3 普通の学校生活を振り返らせながら、理解や支援が「自分自身」にも大切なことであることに気づかせる。																		
15:20	4 交流会が共同プロジェクトであることを理解し、ワークシート②に考えを記入し発表する。(18分)	4 附属特別支援学校の生徒は「お客さま」ではなく、交流会が附属特別支援学校との“共同プロジェクト”であることを意識させてからワークシートに回答させる。																		
15:38	5 お互いの存在について、交流会の実際の内容づくりについて、意識を高める。	5 交流会に向けて、本時の学びが日々の学校生活でも活かせるように意識させる。																		

図1 附属中学校事前学習指導内容

～交流会に向けて考えてみよう～

1年 組 名前：

①学校生活のなかで、「自分もこうしてもらえたらほっとするな、助かるな」と思うことについて、自由に書いてみてください。

②交流会を「共同プロジェクト」として成功させるには、どのようなことを大切にしたらいいと思いますか？

図 2 附属中学校事前学習ワークシート

事前学習ワークシートの「②交流会を『共同プロジェクト』として成功させるには、どのようなことを大切にしたらいいと思いますか？」の設問にたいする生徒の回答を以下に抜粋する。

**表 1 附属中学校生徒の回答（抜粋）**

まずどちらからもアイデアを出して、両方で議論し、内容を決定する。特支の意見を尊重する。
自分たちと特別支援学校のみんなが楽しめる遊びをする。自分たちの基準と特別支援学校のみんなの基準の中間をとる。臨機応変に対応する。
差別をせず、みんなが同じ立場として交流する。相手のことを考えて行動する。計画をたてる時、平等に誰でもできることを考える。
お互いの意志を大切にしながら作っていく交流会。楽しみながら、自然に笑顔になれる温かい雰囲気。
特別支援学校の生徒だからと特別扱いするのではなくて、話し方を少し変えたりするだけで、他はふつうに友人として接する。
特別支援学校の人たちと附中の代表が集い、交流会について語り合う時間を大切にしたら良い。
附中で決めたことを特別支援学校に了解を得る。
自分たちだけではなく、相手の意見をとりいれること。お互いに尊重しあう。皆でたのしくできるようなのをつくりあげること。平等で協力。
いいところをみつけまくる。共に楽しむ。いつもの集団でかたまらない。

これらの他にも、ワークシートの回答全般を通して、「ともに楽しむ」「全員で楽しむ」「お互いのことを考える」ことを意識していると思われる回答が多く見られた。これらの記述から、事前学習のねらいは一定程度達成されたと考えられた。

## 2.2 附属特別支援学校での事前学習

附属特別支援学校中学部においても、交流担当教員が事前学習を実施した。事前学習では、附属中学校についての資料（写真やDVD）を用いて事前に附属中学校の様子を知ること、交流会への見通しをもつと共に附属中学校の生徒に関心をもち交流会へ参加することへの期待感を高めることをねらいとした。

また各クラスで教師と共に附属中学校の生徒に送るプロフィールカードやDVDレターを作成し、自己紹介などの練習をしたりすることを通して、自分のことを知り、附属中学校の生徒に自分のことを伝えようとする気持ちを高めた。

生徒の記述では交流会への期待と不安の双方の気持ちが表現され、交流会への見通しが形成されたことがうかがえる。

- めあて** ○活動を楽しもう。  
 ○たくさんの友達と話そう。  
 ○マナーを守ろう。

附属中での活動	めあて
① ひかえ室(会議室)に行く	
② 班ごとにそれぞれの場所に移動する。	
③ 交流会 ・自己紹介 ・「つばさをください」の歌 ・ゲーム ・レクリエーション	
④ 附属中の友達と弁当(各教室) 	
⑤ 終了式	
⑥ ひかえ室(会議室)に行く ふりかえり	

※長崎大学正門前解散：14：10

図3 附属特別支援学校事前学習ワークシート(抜粋)

<small>いま</small> 今のきもち			
<small>じ こしょうかい</small> ○自己紹介をする	○		
○ゲームやレクリエーションをたのしむ	○		
○たのしくお弁当 <small>べんとう</small> を食べる	○		
○たくさんのおともだちとはなしをする		○	
今のきもちをかいてみよう	はなしか"出る"かなってしんは"いて"す		
	ゲームが"楽"しみです		
	お弁当を食"べる"ときに友だちと		
	なかま"く"はなしを"たい"です		

図 4 附属特別支援学校生徒の回答（抜粋）

### 2.3 交流会当日の様子

以上の事前学習をベースにして交流会を開催した。附属中学校1年生の各クラスに附属特別支援学校中学部の生徒が分かれて加わり、レクリエーションから給食の時間まで交流を実施した。



図5 各交流クラスとの対面



図6 レクリエーションの様子①



図 7 レクリエーションの様子②



図 8 レクリエーションの様子③

事前学習で学んだ内容をもとに、積極的に関わり合おうとする様子がいずれのレクリエーションでも見られた。また「附属特別支援学校の子に最後に感想を聞きたい」と提案してきたクラスもあり、互いの気持ちを直接確かめ合おうとする姿勢が見られた。附属特別支援学校の生徒も、自己紹介や自分の好きなことを相手に伝えながら、同年代の友人達との時間を楽しもうとする様子が見られた。

## 2.4 交流会の振り返り学習（附属特別支援学校）

交流会終了後、附属特別支援学校では全体で振り返り学習の時間を設けた。

ふりかえり			
今のきもち			
○自己紹介ができた	<input checked="" type="radio"/>		
○友達とゲームやレクリエーションをたのし んだ	<input checked="" type="radio"/>		
○たのしくお弁当をたべた	<input checked="" type="radio"/>		
○たくさんの友達とはなしができた	<input checked="" type="radio"/>		
今のきもちをかいてみよう	ゲームは、けんけんがらーをして楽しかったです		
	ころがしドッジボールはあたっていなかった		
	のでうれしいです。		
	また、やりたいと思いました。		
	友達とはなしておもしろかったです。		
	どうそう中のはなしをしました。		
	また、こうりやうに行ってみたいです。		

図 9 附属特別支援学校中学部生徒の振り返り（抜粋）

図9は、図4と同一生徒の回答である。事前に「はなしができるかなってしんばいです」と綴っていたこの生徒は、交流後に「友達とはなしておもしろかったです。とうそう中のはなしをしました。また、こうりゅうに行ってみたくです」と自分の気持ちと考えを述べ、附属中学校との友人との関わりの経験を具体的に振り返ることができていた。

また「おべんとうのときもっとはなしができるよかったです。ゲームはジャンケンれっしゃところがしドッチボールをしました。じこしょうかいはきんちょうをしました」と綴った生徒や、「交流で一番楽しかったのはミニサッカーです。(中略)PKで見事にシュートを決めました。少し高く上げ過ぎたのでそこを気をつければと思いました」と綴った生徒のように、次回もっとがんばりたいことについて意識が向いた生徒も複数見られた。

## 2.5 交流会後の教員アンケートから（附属特別支援学校）

附属特別支援学校ではさらに、交流に関わった中学部担当教員にたいして、交流担当教員からアンケートを行なった。項目は「①日程について」「②活動について」「③その他（両校の子供たちの様子、事前・事後指導、交流の目的・意義についてなど）」の3点である。

表2 実施日程についての教員の回答（抜粋）

部行事が多い時であるが、相手のあることなので、実施できる日でよい。
特に問題なかった。
よかった。
特に問題はない。

表3 交流会の活動内容についての教員の回答（抜粋）

3班に同行したが、ゲームもよく考えてあった。事前1日目（全体→学級）、2日目（班ごと）の流れもわかりやすくよかった。
各クラス工夫してありよかった。
ゲームなど、それぞれのクラスで考えていたので、オリジナリティーがあってよかった。本校の生徒も十分に楽しんでいる様子が見られた。
本校のスポーツの学習でやっている活動、そうじ、片づけ作業など、本校で行っている活動を通常の子ども達と一緒にできるという計画でできないか。障害のあるなしにかかわらず一緒に楽しめる、お互いができることを協力できた経験といったことができることが共生社会作りにつながるのではないかと思う。

表 4 その他についての教員の回答（抜粋）

<p>附中の生徒が考えたゲームのルールについて、教師のアドバイスなど、どの程度は知っているのか知りたい。附中の生徒で、かかわるのが上手な生徒も数名いてよかった。</p>
<p>自然に関わっている様子が見られ、私たちが間に入らなくても、交流出来ているように感じた。本校の生徒はなかなか話しかけられないようであったが、それは経験が必要か。附中の先生が雰囲気盛り上げてくださり、よい交流だった。</p>
<p>学年交流が望ましいと思う。すばらしい事前学習よりも回数を重ねることがかわり方を知ることに繋がると思う。本校の子ども達にとっても、去年見た顔があるのとないのとは違うと思う。また、本校の2年生や3年生が、附属中の1年生に何かをしてもらうという感じもどうなのかと思う。</p>
<p>前回よりも活動内容は工夫してあったのではないか。附中側の紹介ビデオも、“何かを伝えよう”という思いがあった。何より“待ってます”と全員から言われて、生徒たちは喜んでいて。生徒たちは楽しんでいたので問題ないが、中3の生徒（本校）と中1（附中）というのが、同学年でやるのがいいだろうと思う。</p>

日程については概ね問題ないと回答された。交流会の活動内容については、各クラスでよく工夫されていたという意見が複数挙げられた。また附属特別支援学校側で実施している内容を、附属中とともに行なうのはどうかという意見が挙げられた。「その他」では、附中の生徒がよく関わっていたことへの記述のほか、交流回数の向上や同学年交流を望む声が挙げられた。

### 3. 考 察

今回の交流会では、附属中学校では大学教員が事前学習として授業を行なった。「障害理解教育」としての位置づけももたせた内容であったが、50分1回のみでの授業であらゆる内容を盛り込むことはできないため、大きな枠組での内容に終始した面があった。そのためとくにワークシート①の学校生活で自分がされてうれしいこと（支援）については、生徒の回答内容が非常に多岐にわたり、授業の中で課題を焦点化させきれていなかったことが指摘できる。一方で、交流会に向けて「共同プロジェクト」をどのように実現していくかについては、各々が自分の考えを述べることができている。交流会の本番での様子にもそれは表れており、生徒たちが共同そして共生を自分なりに考えて行動するきっかけになったのではないかと考える。なお附属中学校では、交流会後の振り返りの授業を今後大学教員側が実施する予定である。

附属特別支援学校においても生徒がよく関わりをもてていたという声が挙げられた他、附中側で教員のアドバイスがどの程度入っていたのかがポイントとして挙げられている。次回以降へつながる課題として、交流会の実施内容について両校で事前協議を行なうことにより、交流に際して教員がどこまで支援的介入をするかについても確認ができると考える。またその際には、交流を行なう意義・目的についても、両校の教員および大学がすりあわせを重ねていくことが不可欠であろう。

また附属特別支援学校教員から出された重要な指摘として、両校の学年のズレが挙げられる。これは両校全体の交流実施計画ともかかわる課題であるが、附中1年生と附属特支中学部1年生で交流を持ち、翌年にお互い2年生になった時に再度交流をするという流れが、本来であればやはり望ましいと考えられる。両校の人数比の問題や、各学年での実施日程の確保の問題等があるが、今後検討が不可欠であるといえる。

## 4. まとめ

### 4.1 連携の充実へ向けて

今回の交流研究では各交流活動における両校の担当者を明確にし、必要に応じて連絡・調整をスムーズに行えるようにした。また両校のこれまでの交流の経緯と今回の実践研究の意義・実施内容・実施手順等を詳細にとりまとめた「実施計画書」を作成し、担当者の引き継ぎと交流研究の継続実施を支障なく行えるようにした。

しかし担当者同士の日程調整が困難な場合も多く、事前協議・事後反省の時間の十分な確保が大きな課題である。そのためには、まず交流活動が両校の年次計画へ明確に組み込まれることが不可欠であるといえる。

### 4.2 交流研究の附属学校園全体への波及

本実践研究の目標のひとつは、冒頭に示したようにインクルーシブな視野からの障害理解教育の推進である。そのためには、担当者間・学級（学部）間レベルでの協働から、学校間レベルでの協働へ発展させていくことが不可欠である。附属学校園全体で共生社会の形成を実践していくためには、交流を一つの軸としながら教職員へ向けたインクルーシブ教育の理解・啓発も重要な柱となろう。

また「地域のモデル校」（文部科学省、2009）としての役割も担う国立大学附属学校において、当該分野における実践研究の蓄積はいっそう不可欠であるといえる。

### 4.3 年間における交流回数の上昇

今回の交流は、附属特別支援学校・附属中学校における生徒・教員ともにその

意義を認識する実践となった。しかし附属特別支援学校教員から指摘も出されているように、1 回だけの障害理解教育や交流活動ではおのずから限界があり、交流での学びを経験として生徒に定着させることも困難である。前述した年次計画への組み込みとあわせ、交流回数の向上がきわめて重要な鍵となる。

### **参考文献**

中央教育審議会（2005）「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」。

文部科学省（2009）「国立大学附属学校の新たな活用方策等について」。

文部科学省（2012）「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」。